寛政度内裏造営以降の内侍所仮殿の造営・下賜と神嘉殿

THE CONSTRUCTION AND PRESENTATION OF THE KARIDONO OF NAISHI-DOKORO
AND SHINKA-DEN FOLLOWING THE KANSEI PERIOD RECONSTRUCTION
OF THE IMPERIAL PALACE岸 泰子*
Yasuko KISHI

The *karidono* of the *naishi-dokoro* in the imperial palace had been also reconstructed repeatedly during the late modern period. The *karidono* of the *naishi-dokoro*, following the Kansei period reconstruction of the imperial palace, was presented to noble families who specialized in devotional ritual. Plans were also made to use the *shinka-den* as the *karidono*. This was related to a proposal to transform the *shinka-den* into the *naishi-dokoro's karidono*.

Keywords : *naishi-dokoro, karidono, presentation, construction, shinka-den, imperial palace in the Kansei period*

内侍所, 仮殿, 下賜(拝領), 造営, 神嘉殿, 寛政度内裏

はじめに

本稿は、拙稿「近世内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」¹⁾に続き、内侍所仮殿に着目し、その造営と下賜について考察するものである。

内裏の南東に位置する内侍所は神鏡を奉安することを主な目的とする建物である。神事や祈祷を行う場でもある。近世において内裏にある内侍所は本殿と称される。また、本殿造営・修理時には必ず仮殿を新造し、そこに神鏡を移し奉る²⁾。そして前掲拙稿では、内侍所仮殿(以下、仮殿と略す)が上・下御霊社へ継続的に下賜された事例に着目した。霊元天皇在位時からの朝廷との結びつきを背景に上・下御霊社が仮殿を拝領することによって、内侍所という朝廷の建物をもつ都市民衆の参詣の場が都市京都のなかに形成されたことを指摘した。

しかし、寛政3年(1791)に下御霊社へ下賜されたのを最後に、上・下御霊社への下賜はみられなくなる。上記のような元禄度から寛政度までの内侍所仮殿の下賜・拝領の経緯や意義を考えるならば、文化度以降に上・下御霊社以外へ仮殿が下賜されなくなる要因について明らかにする必要がある。

内侍所仮殿下賜に関しては、京都府の近世社寺調査の報告や藤岡通夫氏の京都御所の研究のなかで概要が述べられている³⁾。また、藤田勝也氏も修士論文のなかで仮殿下賜について触れる⁴⁾。特に藤田氏は、近世の内侍所仮殿下賜事例として嘉永4年(1852)に土御門家へ下賜された際の記録である『内侍所仮殿御寄附之記』⁵⁾(以下、『御寄附之記』と略す)に着目する。本史料は、当時の土御門家当

主土御門晴雄が記したものであり、嘉永4年11月2日に土御門家が提出したという「拝領之願書」や嘉永5年正月に宮中より下賜決定の知らせが来た前後の同家の動向の記録などが含まれる。拝領側の史料が少ないなかで、このような重要な史料に注目し、仮殿下賜の経緯を確認しようとした点で藤田氏の研究は評価できよう。ただし、藤田氏の内侍所に関する研究は古代から中世に重点が置かれていることもあって、近世後期の仮殿については嘉永度造営の仮殿が土御門家へ下賜された経緯を整理したにとどまる。

ところで、仮殿の下賜の年代や下賜先をまとめたものとして、前掲『御寄附之記』に以下の記述がある。

広橋ヨリ借用写置

切紙ニ

天保二年 水無瀬家

文化七年 神嘉殿御修覆御用立

寛政二年 下御霊江

六坪分土御門家江拝領之處

安永三年 主殿司其外江

宝暦五年

享保十八年 上御霊江

右内侍所御造営之度ニ御仮殿拝領

内侍所仮殿下賜先を記したもので、藤田氏も仮殿下賜先の根拠として重視しているが、広橋家より借用したものを書き写している点は注意すべきであろう。他の史料から下賜の事実や経緯を確認することが必要となる。

* 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 助手・博士(工学)

Research Assoc., Graduate School of Architecture, Kyoto Univ., Dr. Eng.

また、先行研究では、仮殿の造営経緯は多少明らかにされてはいるものの、仮殿の新造と神嘉殿の存在が深く関わっていることは指摘されていない。そこで、本稿ではこれらの問題点にもとづき、まず文化度以降の内侍所仮殿造営ならびにその後の処遇(下賜・転用・常設)の経緯を確認する。ついで、寛政度内裏造営以降の内侍所仮殿の造営・下賜が神嘉殿造営と深くかわることを明らかにするとともに、内侍所本殿造営・修理以後の仮殿処遇の背景を考察したい⁶⁾。

1. 文化7年(1810)造営内侍所仮殿と神嘉殿への転用

1-1 仮殿造営・下賜の経緯

【表1】は、寛政度造営以降の内侍所本殿の造営・修理と仮殿の下賜先・転用先を一覧にしたものである。

文化7年(1810)、内侍所本殿の修理が行われることになり、先例通り仮殿が造営された。仮殿は、同年6月18日に立柱、7月3日には上棟となる。神鏡が仮殿に移された後、本殿の修理が行われ、同年12月7日の神鏡の本殿への渡御をもって修理が終了した⁷⁾。

仮殿の処遇については、このとき武家伝奏を勤めていた広橋伊光の日記『伊光記』に詳しい⁸⁾。

文化7年(1810)7月30日に上御霊社より、同年8月4日に下御霊社よりそれぞれ仮殿の拝領願いがあったことが記されており、仮殿上棟から比較的早い時期に上・下御霊社から仮殿拝領の願いが出されていることが確認できる。

しかし、翌年文化8年(1811)正月25日には、仮殿は「此度ハ有思食、何レヘも不賜候」とされ、下賜がなされないことが示される。そして、武家からは、

内侍所御仮殿、此度ハ他江不賜不損様宜計置之由御沙汰之事、右之外雑舎廊下等を以斎行事殿・御厨子所之輩へ願之通可被下候、修理職奉行・修理職へ可被下候、右之趣意可取計、という返答があり、斎行事殿、御厨子預小番衆、修理職等へ雑舎等が下賜されることとなり、仮殿以外は願出の通り下賜されることになった⁹⁾。そして、同年2月28日条では以下のように記される。

一、内侍所仮殿被用神嘉殿事内談、以武家所司代江申差如左、内侍所仮殿、此度者依有 思食他江不賜之旨、先達御沙汰之由申入候、右子細者神嘉殿此後御修復之節、彼仮殿被引直神嘉殿御修復之相成候得者、殊御木材も宜永久御保方ニも相及甚御趣合意候、仮殿を神嘉殿の修復に用いることは木材の「永久御保方」という「御趣」(ここでは天皇の意向であろう)に合うので、ほかのところへは下賜しないことが京都所司代に伝えられる¹⁰⁾。実際、文化8年閏2月20日条と文化8年7月3日条には、広橋伊光を交えて神嘉殿修復について内々の相談が持たれたことが記される。しかし結局、文化8年8月12日、神嘉殿の修復は「御勘考」があるという理由で見合わせられることになった。

神嘉殿は新嘗祭を行う場所である。宮中での新嘗祭は、寛正4年(1463)に中断し、元文5年(1740)に一度再興されたものである。その後寛政3年(1791)、朝廷は強行するかたちで神嘉殿を宮中に再興・造営したという経緯がある¹¹⁾。修理の対象となった神嘉殿は寛政度に造営されたものである。

さらに先の史料のなかで、仮殿の材は今後の神嘉殿修復時に用いるという記述がある通り、4年後の文化12年(1815)、神嘉殿の修理が計画された際にも内侍所仮殿の材を転用することが検討されてい

【表1】内侍所仮殿の下賜先

	内侍所	仮殿下賜年	仮殿下賜先
寛政2年(1790)	造営	寛政3年(1791)	下御霊社
文化7年(1810)	修理	(文化8、12年)	神嘉殿へ転用を計画
文政13年(1830)	修理	天保2年(1831)?	水無瀬家(宮)?
嘉永4年(1852)	修理	嘉永5年(1853)	土御門家
安政2年(1855)	造営	安政3年(1856)	霊光殿天満宮か
慶応元年(1865)	修理		そのまま残す

る(1-2参照)。

ここで、仮殿の神嘉殿への転用の具体的な仕様計画がわかる図面として「内裏(寛政度)神嘉殿平面図」(東京都立中央図書館木子文庫所蔵)に注目したい。当時内裏造営に関わっていた大工木子家に伝わる指図の1枚であるが、「朱引破風 御仮殿之俣ニ而此所御見付如图出来之積り、墨引破風者図之通格好ニ而西裏之方江出来之積」と書かれた押紙がある。「仮殿」という名称を用いる内裏の建物は内侍所が唯一であったことから、本史料の「仮殿」とは内侍所仮殿であると考えられる。また、指図中には「檜皮葺」の指示もあり、後述する「神嘉殿代以後御修復心得方之儀ニ付書付」にある文化12年の修理時に檜皮葺にすることが計画されという記述と一致する。よって、朝廷は実際に仮殿を神嘉殿へ転用することを計画し、図面まで作成させていたのであろう。

1-2 神嘉殿修理の取り止め

しかし、文化8年、12年ともに、神嘉殿の修理が行われたという史料は確認できず、行われなかったものと考えられる。その理由については、文化12年の事例に詳しい。

『山科忠言卿伝奏記』¹²⁾には、文化12年の神嘉殿修理の計画が記されている。それによると、文化12年8月1日に神嘉殿の破損が報告され、修理を含めた相談がなされている。同年8月11日には京都所司代酒井讃岐守への報告が記録される。その内容は、檜皮葺の仮殿を転用することで、当時柿葺であった神嘉殿を檜皮葺にするというものであった。そして、同月27日には酒井忠進からの返答が送られてくる。そのなかで酒井は、古木材を用いても修理に際しては朝廷の費用負担で行うことを確認しているが、同時に自身がうわさとして聞いた話として、以下のように記す。

右御仮殿木材を以神嘉殿御造替之儀ハ全下より申上候之事有之、先達而御沙汰も有之候得共、一体神嘉殿者重キ御神祭之御殿ニ而候得者内侍所も清浄之御殿ニ候といえとも右御仮殿古木材と以重キ御神祭之仮御造替之儀ハ篤とも被為思食、且者右木材ハ例解賜之儀相願候事有之被下ニ不相成候品ニ有之所、右被下之儀と被停候而、右御仮殿之木材を以御本殿之木材ニ被相用、木材之善悪甲乙之故を以正理ニもとり候儀者 叡慮不易、且神嘉殿之儀者表向之御場所柄衆人見聞仕候儀ニ付、古木材殊御仮殿を申御外聞ニも相抱り如何敷儀ニ思食候段、風ニ承候趣申聞候付、誠恐入叡慮之趣、至極御尤之御儀道理之至当と奉存候付、仮殿の転用はあくまで関白や伝奏ら朝廷を運営する公卿らが言い出したことであったという。一方光格天皇は、内侍所は「清浄之御殿」、神嘉殿は「御神祭之御殿」であり神嘉殿に造替することはよいが、①仮殿はこれまで下賜してきた先例があるにもかかわらずそれ

を退けること、②内侍所仮殿の材であったとしても「衆人」が見聞する場である神嘉殿に古木材を用いること、はいかがなものかという見解を示していたとする。そして、酒井も天皇の意見は尤もだという。幕府側も神嘉殿を内侍所仮殿とすることは認める一方で、仮殿の下賜や神嘉殿の重要性を認めていた点は注目される。ただし、酒井の回答は、天皇と朝廷の意向が異なることへの確認を求めるものであり、転用の是非は判断していない。所司代の問いに対して、関白らは朝廷が主張する仮殿を転用し神嘉殿を桧皮葺にするという判断は適当であることを幕府に主張する。

しかし、結局、仮殿の転用、神嘉殿の修理は実行されなかった。「神嘉殿代以後御修復心得方之儀ニ付書付」(『御造営手留』)¹³⁾は、安政元年(1854)の禁裏造営に際し川路左衛門尉・浅野中務少輔・立田岩太郎から江戸表に提出された届けであるが、そのなかで神嘉殿修理について以下のとおり記される。

既ニ文化十二亥年、内侍所御仮殿神嘉殿ニ被引直度、御屋根を桧皮葺反屋根之方ニ相成候様被致度差支無之上者表立可被申立旨、伝 奏衆内談有之、其節御好之通桧皮葺反屋根出来候得者御引直御入用者勿論、此後御修復其御手沙汰ニ而者出来兼可申由を以、伝 奏衆江御示談之趣茂有之候付、於勘考評議仕候処、「御手沙汰」つまり朝廷の費用負担では桧皮葺の管理や修理が難しいことが問題となり、仮殿を神嘉殿に転用し、神嘉殿を桧皮葺にする修理は実行されなかった。結局、文化度造営の内侍所仮殿は、御所内にストックされていた可能性が高いということになる。

2. 天保2年(1831)水無瀬家(宮)への下賜

文政13年(1830)、内侍所本殿の修理が行われた(9月18日仮殿上棟、10月16日仮殿渡御)。この時造営された仮殿は、前掲『御寄附之記』に「天保二年 水無瀬家」に下賜されたと記録されている。

水無瀬家は、現在の大府府島本町にある水無瀬宮(現在は水無瀬神宮)を守護する公家である。水無瀬宮は、後鳥羽天皇・順徳天皇・土御門天皇を祭神としており、代々天皇家からの保護が厚い。現在の本殿は、明正天皇時の寛永16年(1639)から19年ごろに内侍所を下賜されたものとされる¹⁴⁾。

仮殿の下賜については、『御所々御入用筋書抜』⁴⁾¹⁵⁾に京都西町奉行松平伊勢守宛の「内侍所御仮殿水無瀬宮江御寄附之儀」という書簡が残る(天保4年(1833)8月11日京都所司代太田備後守へ渡されている)。そこには、「水無瀬宮江御寄附被為在候御沙汰之上者、思召之通御寄附被為在候様、尤御寄附ニ付諸入用相拭之儀ニ候、」とある¹⁶⁾。よって、水無瀬宮(家)へ仮殿の寄附・下賜の沙汰があったことは確認できるが、水無瀬宮(家)側の史料がなく¹⁷⁾、どの部分が下賜されたのかなどは分からない。さらに、文政13年(1830)の仮殿造営から約3年経過して松平定朝への書簡が記されていることなど、下賜の過程に不明な点が多い。

3. 嘉永5年(1853)土御門家への下賜

3-1 仮殿造営・下賜の経緯

この事例については、まず、このとき武家伝奏を勤めていた三条実万の『公武御用日記』¹⁸⁾から仮殿造営と下賜に至る過程を確認する。

嘉永4年(1852)5月7日、文政年間に行われた内侍所本殿の修理

において「背割無」で取替えられなかった柱に破損があることが三条実万へ報告され、翌日10日には「武士用人」へ「文政度取調乾割之絵図」が差し出された。同月27日条には、禁裏附からの書状として6月8日か9日には仮殿上棟が出来よう先例に基づいて取り計らうことが記される¹⁹⁾。これを受けて、仮殿が造営され、7月1日には仮殿渡御、同月22日からは本殿の修理が行われ、11月12日には本殿の修理が終了し本殿への渡御が行われている。

仮殿下賜に関しては、下御霊社神主より6月中に拝領願が武家伝奏(三条実万)らに届けられていた²⁰⁾。しかし、同年11月2日、土御門家から内侍所仮殿の拝領願が出され²¹⁾、翌日11月3日には下御霊社の拝領願があるにもかかわらず、仮殿が土御門家へ下賜されることが早々に検討されている²²⁾。

翌年嘉永5年1月20日には、土御門家へ「御内意」が申渡され、翌21日には先例の如く修理職奉行に「内侍所仮殿雑舎」、斎に「前廊下」が下賜されることが示された。

3-2 土御門家に残る史料

次に、拝領側(土御門家)の記録である『御寄附之記』に着目してみたい。

本史料には、拝領願が収められている(傍線は筆者による)。

嘉永四年辛亥十一月

内侍所仮殿拝領之願書左之通

奉書四ツ折美濃紙包

内侍所御修覆無御滞被為済、来十二月 本殿渡御被 仰出恐悦存候、右渡御被為済候後、御仮殿土御門家江、御寄附願候儀相成間敷哉、社頭修覆も近年二者仕度存居候間、若右 御仮殿御寄付相成候、以之深畏入存候、元来亡父晴親兼而之懇願臨時御祈祷之節も手狭に而行届兼、又者長用御祈祷にも都合宜儀義有之候間、権殿一字致造立度旨、平日申居兼而之念願候間、寛文年中并安永三年九月等拝領之例も有之候ニ付、此度之内侍所仮殿拝領之儀相願候事相成申間敷候哉、願之通被 仰付候者、誠以深畏入存候、右御憐察給宜御取成御沙汰願入存候也、

十一月二日 晴雄

三條大納言殿

坊城前大納言殿

寛文年間や安永3年(1774)にも土御門家へ仮殿が拝領されたことに加え、仮殿の拝領は先代晴親から切望していたことであり、内侍所仮殿を臨時と「長用」(おそらく重用か)の祈祷の場として拝領したいという²³⁾。これは、18世紀に朝廷の祈祷が行われる上・下御霊社へ継続的に下賜された理由とも共通する²⁴⁾。

また、土御門家は安永3年(1774)等に仮殿を拝領しており、先例を重視するというこれまでの下賜の経緯が踏襲されていることもわかる²⁵⁾。

4. 安政3年(1856)内侍所仮殿下賜

安政3年に下賜された仮殿については、東京大学史料編纂所編『大日本維新史料稿本』安政元年(1854)11月27日条「自今桂殿ヲ桂御所ト称ス」項に、安政3年の仮御所建物ならびに内侍所仮殿下賜に関する史料が網羅的に集成されている。以下、本稿本の内容を原史料で確認しつつ、安政3年の内侍所仮殿下賜の過程を整理する。

嘉永7年(安政元年)4月6日、敏宮御殿から出た火災によって内

裏が焼失し、孝明天皇は聖護院に移られた²⁶⁾。その後、4月15日には天皇は桂宮邸に移り、同所を仮御所とされた。7月18日には内侍所仮殿が仮御所に上棟され、翌日(19日)仮殿渡御が行われた。その後、安政2年に内裏造営が終了し、11月3日引渡、同月23日には天皇が仮御所から内裏へ遷幸し、内侍所も同日渡御している。

『東坊城聡長公武御用日記』²⁷⁾安政2年9月4日条には「内侍所仮殿以下被下方」については寛政度の事例の如く扱うと記される²⁸⁾。そして、同月10日には、斎・修理職奉行・修理職・御厨子所預からの拝領願4通を議奏らが確認したという。さらに、同月12日条には以下のとおり記される。

内侍所仮殿 靈光殿天満宮東照宮相殿社若江修理大夫被下候而、
武辺差支無之候哉、可取調大限守へ申含、

靈光殿天満宮は、現在の京都市上京区徳大寺殿町にある神社で、祭神は菅原道真と徳川家康である。寛仁2年(1018)に菅原道真を祀るために河内国若江郡に創建された²⁹⁾。応仁・文明の乱以後は東寺観智院に御神璽が奉遷され(神官若江家断絶以後は祭祀も東寺が行った)ていたが、寛永11年(1634)に神官若江家(理長)の再興が認められ、理長の邸宅(上京区塔ノ段藪ノ下)に奉遷されたという³⁰⁾。寛永11年(1616)には後水尾天皇作の東照宮(徳川家康)尊像を合祀した。宝暦11年(1761)に現在の地に移ったという。その若江修理大夫(量長)³¹⁾への下賜の取調べが指示される。

そして『聴長卿公武御用日記』³²⁾安政3年(1856)正月7日条には、仮御所となっていた桂宮に造営されたすべての建物について、以下のような記述がある(〈〉は割註を示す)。

一、謁閑白殿(申次俊禰朝臣)、桂 皇居仮建物惣如寛政例可賜桂家之事、

遣水皇居之儘可被残之事、鷲尾家敷地被取建候地震御用意御建物鷲尾家へ可賜之事、 内侍所仮殿已下去年(本ノママ)之通可賜

閑東済成候旨、淡路守御附書取入覧可附于議奏被令属当番広橋、桂皇居の仮建物はすべて桂(桂宮)家に引き渡されることとなったという³³⁾。ただし、内侍所仮殿は、『桂宮日記』³⁴⁾安政3年正月14日条に、

一、桂 皇居総而仮建物寛政度之通桂家江被下候事
(中略)

一、内侍所御仮殿惣建具量御掾廻り八垣雲階清走り式拾四坪
靈光殿天満宮 東照宮 相殿社
若江修理大夫

右御寄付

とあるように、靈光殿天満宮東照宮相殿社、若江修理大夫へ寄附されることが示される³⁵⁾。

ここで重要なのは、これまでの朝廷の祈祷を行う上・下御霊社もしくは土御門家への下賜とは異なり、徳川家との関係が深い神社への下賜が行われたという点である。残念ながら幕府側の動向を確認できる史料がないが、幕末の朝幕関係を考える上で興味深い事例である。

ただし、本事例の場合、靈光殿天満宮側の記録が確認できない。『庚午十月改 社寺録 上京之部式』³⁶⁾には明治元年(1868)11月に靈光殿天満宮から京都府に宛てた書類が残される。そのなかで「一、嘉永七年仮社類焼二付 天朝ヨリ内侍所御仮殿御寄附二相成候事」とあるが、一方で「嘉永七年本社類焼後右之仮社」として桁行一間

梁間四尺の「仮社」の図面が描かれるのみである。また、現在の社殿は明治5年(1872)に九条家からの寄附によって再建されたものであり、安政や慶応期に若江家が社殿を造営した記録が残っていない。従って、靈光殿天満宮の修理工材として一部のみが使用された可能性、若江修理大夫が御所内の建物の造営・修理のために拝領した可能性も否定できない³⁷⁾。また、仮建物がすべて桂御所に下賜されたという記述についても今後さらなる検討が必要であろう。

5. 慶応元年(1865)造営の内侍所仮殿

慶応元年(1865)には、内侍所本殿修復が計画された。慶応元年閏5月7日仮殿上棟、6月9日に仮殿への渡御が行われ、本殿修理終了後の同年11月22日には本殿への渡御が行われている³⁸⁾。

慶応度造営の仮殿は、そのまま残す計画が朝廷から示されている。

内侍所御仮殿、從今度御平生居置可相成候二付而者、御場所是迄トハ被改別紙図面之通可然候、且御 仮殿付刀自詰所仮屋は又從今度居置二付図面之通可出来、是迄与者坪数相増候得共、今後刀自通廊下者聊茂取建ニ不及候間、右用途立用を以下然取斗有之度、且右仮屋先例甚た匱来末物ニテ済来候得共、以来居置之事故木材細工等入念出来相成候様、閑白殿御命ニ候間可被相心得候、出御仮御廊下ハ御平生御邪魔ニ相成候故、如先例御修復出来 本殿還御被為済候得者取払可相成候事、

「(内侍所御仮殿從今度御平生居置可相成候儀二付)伝奏衆被差越候書付写」(『江戸城多聞櫓文書』)³⁹⁾の一部であるが、仮殿は常設し、廊下などは邪魔なので取り払うという。

また、仮殿の場所がこれまでとは異なるという記述については、「安政度内裏(慶応)内侍所・仮内侍所指図」⁴⁰⁾から、梁行二間桁行四間の仮殿が本殿の東南に配置されたことがわかる。これまで本殿修理時に置かれた本殿の西南の位置とは異なる場所で仮殿は常設されることになる。

6. 神嘉殿の造営と内侍所仮殿

最後に、仮殿の処遇(下賜、転用、常設)の背景を考えてみたい。

6-1 「祭祀施設」への下賜

藤田勝也氏は、内侍所仮殿は共通して祭祀施設として下賜もしくは転用されていると指摘する。確かに、神嘉殿は新嘗祭を行う場所であり、神事・祭祀を行う場所としての共通点はある。さらに文化度以降の下賜先をみても、朝廷のための祈祷を家職とする公家や神社へ下賜されている。

ただし、祭祀や神事を行う場所に下賜することが朝廷側の下賜の根拠であるならば、上・下御霊社への下賜が中止される理由にはならない。祭祀・神事施設としての共通点だけが仮殿の転用や下賜の根拠になっていたわけではないだろう。

6-2 経済・社会状況の悪化と古材の転用

ここで、仮殿をとりまく状況として確認しておかなければならないのは、近世後期の朝廷・幕府はともに経済状況が悪化していた点である。これはすでに、奥野高広氏の研究⁴¹⁾のなかで詳しく分析されている。また、度重なる火災によって内裏造営を余儀なくされるなかで内裏建物の造営や修理にかかる費用が問題となっていた。実際、「神嘉殿以後御修復之心得」(『安政度内裏造営志』二⁴²⁾)では、これまで禁裏御賄金銀のうち三分の一が建物の修理に使われている

ことに孝明天皇が憂慮していたことが示される⁴³⁾。

このような経済的な理由は、天明の大火後に造営された寛政度内裏造営時の朝廷・幕府の対応からも確認できる。寛政度内裏造営については、藤田寛氏の研究に詳しい⁴⁴⁾。それによると、天明8年(1788)、大火により焼失した内裏を造営するに際し、朝廷は裏松光世の「大内裏図考証」にもとづく古儀を採用することとし、幕府にその旨を伝えた。しかし、幕府は、民力衰微から仮普請とすること、宝永度内裏と同規模の内裏を造営するよう返答した。結局、朝廷が古儀を用いることを押し切る形となるが、寛政元年(1789)6月、老中松平定信から京都所司代へ、内侍所や紫宸殿、清涼殿などは「不軽御場所」であるために要求通り古儀を用いてもよいが、人民の困窮を救うために、内裏造営に用いる木材の種類や仕様を変更するように申し入れがあった⁴⁵⁾。

内侍所仮殿は重要な場所であるが、仮殿は新材を用いて建設するものの本殿の造営・修理が終われば解体するものである。上述したように朝廷・幕府の経済状況が悪化するなかで、仮殿の下賜や木材の転用は解決すべき課題となっていたのであろう。

6-3 神嘉殿造営と仮殿造営の関係

さらに確認しておきたいのが、内侍所仮殿の造営と寛政3年に朝儀再興を強くすすめる光格天皇のもと朝廷側が再興・造営した神嘉殿との関係である。神嘉殿造営の過程で、『執次所日記』(寛政3年下)⁴⁶⁾11月3日条には以下の通りの通達が出されている。

一、御附衆々被相渡書付左如

神嘉殿代御造立之儀、奥向方金三百両被差出、其除之分者御定高内ヲ以如何様御省略いたし事、輕如形ニ御取建有之候様ニ被遊度旨、右御出来之上者永ク御用ニ相成、天明度被 仰出候趣者更ニ不被及御沙汰、且内侍所御仮殿之御用有之節者、御手輕之御建物ニ者候得共、清淨ニ出来候御殿を 御仮殿ニ被用候得者、万端御都合可宣御沙汰ニ候由、伝奏衆々書取を以被申聞候ニ付、先達而各江申談候処、御定高之由ニ而手輕出来可致旨被申聞候、其後表立 神嘉殿御造立之儀被 仰出候段、伝奏衆々書付被差出候間、則関東江申達候処、(中略)右 神嘉殿代御造立ニ而以来者伝奏衆被申立候通、弥御建直等之儀者勿論御手沙汰等ニ而も往々御修覆之廉茂相増候儀ニ有之候間、旁以新殿御造立之儀者不容易儀ニ付、伝奏衆々始向々掛り之面々ニ茂其旨相心得被取斗候様、御相達各其外右江抱り候向々江茂申渡候様、年寄衆々申来候間、則伝奏衆江相達候間可取其意候、

右之通太 備中守殿ニ被仰渡候旨、為心得此段相達候、

朝廷は、朝廷の費用負担で神嘉殿を造営したい。もし、それが出来るならば、神嘉殿は永く使用することができるので天明度の御趣意(寛政度内裏造営の際に朝廷側も人民の困窮に配慮した御所の造営の必要性をみとめていたことを指すと考えられる(6-2参照))に合致するとともに、神嘉殿は「清淨」つまり神事を行う聖域とされる御殿であるから内侍所仮殿とすることで都合がよいという⁴⁷⁾。すなわち、朝廷は当初から神嘉殿造営のために仮殿を代替とする案を提示したのである。

一方、幕府からは、御手沙汰(朝廷の費用)を用いるといっても新殿の造営は不容易であることが確認される(実際には、神嘉殿は新造される)。さらに、安政度内裏造営に際し幕府側が作成した前掲「神嘉殿代以後御修復心得方之儀ニ付書付」には以下のように記される。

其後文化六巳年内侍所御修復之節は可被用之儀も有之由を以猶又被申立、御仮殿御新造相成は以来茂度々被申立同様之儀ニは候得共、今般御屋根も桧皮葺ニ出来、御手重ニ茂相成御手沙汰ニて之御修復等出来兼候得は、幸南之方之被寄御屋根も桧皮葺ニ茂被成済候上は如何様ニも被宵候テ元來之御所向御沙汰ニ被復、以後内侍所御仮殿ニ被用候積其節高サ五尺五寸之都合ニ相成候並床相整御仮殿御新造者被相止メ候様、

幕府は、安政度に造営した神嘉殿の屋根は桧皮葺であり、置床などの工夫をすれば仮殿として用いることができるので、以後は仮殿の新造を行わない方針を再確認している。

そして、慶応元年2月に禁裏附小栗下^(寛永)総守他二名から幕府に差し出された「内侍所御修復並御仮殿御造立之儀取調候趣申上候書付写」(『多聞櫓文書』)⁴⁸⁾では、本稿で扱う内侍所仮殿の事例と神嘉殿との関係が朝廷・幕府の意見をもとに整理される。要旨をまとめると以下ようになる⁴⁹⁾。

- ① 御所向(朝廷)は、寛政3年に神嘉殿代を造営したときに内侍所仮殿として用いることを計画していた。仮殿は桧皮葺であり神嘉殿は桧皮葺でないので不都合であるが、仮殿とするまでは薄柿葺でよいとした。また、仮殿の床高5尺5寸であるので、神嘉殿(床高は3尺5寸)に置床をすることで仮殿として代用できるとする。
- ② 文化度の内侍所本殿修理時には内侍所仮殿として神嘉殿代を用いることが計画されたが、「所々御差支有之」という朝廷の意見から、「省略」＝費用の節約を考慮しつつ仮殿を新造することとなった。
- ③ その後、文政12・嘉永2年にも「寛政度之御趣意」で神嘉殿を仮殿とすることも計画されたが、関白・伝奏から「内侍所之儀は格別御崇敬之御場所」で差支えがあるので、仮殿を新造するように再三の申し立てがあった。
- ④ 安政度内裏造営時に新造された神嘉殿は桧皮葺となったので、幕府側は神嘉殿を仮殿として用いることが可能となり今後仮殿は新造しない方針を示していた。
- ⑤ 慶応度は安政度造営から年数がたっていないが(文化・文政・嘉永度は21年余間隔)、雨漏り等が懸念される。
- ⑥ しかし、仮殿が必要であるとの朝廷の主張から、慶応度も仮殿を造営することとなった。

朝廷は、寛政3年の神嘉殿造営にあたり、神嘉殿は内侍所仮殿として用いる、つまり仮殿は新造しない、との認識を示していた。ただし、神嘉殿を仮殿として用いるための条件のなかでも特に桧皮葺でないことが問題となり文政12・嘉永2年の内侍所本殿修理時には神嘉殿が仮殿として用いられることはなかった。

ところが、安政度造営の神嘉殿には桧皮葺が採用され、仮殿代替の条件が整ったことをうけて、幕府は仮殿新造の中止を提示する。しかし、朝廷は、内侍所は崇高な場所であると同時に、内侍所本殿の機能をもつ建物は仮殿だけであるとの認識を持っていたため、仮殿新造の必要性を強く主張する。幕府にとっては朝廷の主張は矛盾したものであったが、結局、慶応度本殿修理時には、幕府は仮殿の新造を認めざるを得なかったと考えられる。

6-4 仮殿下賜・転用等決定の背景

最後に、これらの状況を考慮した上で、各章でとりあげた内侍所

仮殿の処遇の背景をまとめてみたい。

文化7年の内侍所本殿修理に際し、上・下御霊社から仮殿の拝領願が出されたが、朝廷は仮殿を神嘉殿に転用することを計画する。そして、文化12年にも再度仮殿を神嘉殿に転用することを計画している。これは、寛政度内裏造営を契機に幕府から内裏建物の造営・修理費用の節約を求められていたことに加え、桧皮葺の仮殿を転用することで神嘉殿をより格の高い建物にし、朝廷が寛政度神嘉殿造営時に示していた仮殿を神嘉殿で代替する案を実行するための条件を整えるためであったものと考えられる。しかし、朝廷の意向とは異なり、光格天皇は仮殿については下賜することが慣例でありなおかつ神嘉殿に古材を用いることは不適切であるとの意見を示していた。加えて、幕府は神嘉殿を桧皮葺にすることでかかる費用を問題としていた。結局、このような状況において朝廷も転用は実行できなかった。そして、桧皮葺ではない神嘉殿を仮殿として代用することはできないという理由から、以後の内侍所本殿造営・修理時には仮殿を新造し、前例のごとく下賜することになる。

嘉永度造営の仮殿は、下賜の先例がある土御門家へ下賜される。前掲『御寄附之記』嘉永5年2月21日条に以下の記述がある。

下^(ツマ)霊社昨年六月頃ヨリ願書差出置候趣、晴雄者十一月二日ニ願書差出候而願相叶、誠に深有難次第也、全家神之 御高德深恐入次第也、

これまで何度も下賜先となっていた下御霊社が先に拝領願を出していたにもかかわらずその願は却下された。下御霊社よりも土御門家への下賜が優先された理由について、土御門家側は有難いとするのみで明確に記していない。

ただし、土御門家の拝領には、広橋光成が関与している点は重要であろう。それを示すように、『御寄付之記』には光成の関与が度々記される。例えば、嘉永5年1月に仮殿の下賜が決定した後、同じく土御門家へ仮殿が下賜された安永3年の事例に倣って「八垣」を一緒に拝領してはどうかという意見が光成からあり、同年2月21日に土御門家は仮殿と八垣をあわせて拝領することになった。また、「はじめに」であげた仮殿下賜先の記述(『御寄付之記』)は広橋家より借用して書き写したものであり、拝領に関して広橋家の援助が大きかったことがうかがえる⁵⁰⁾。光成は、議奏として朝廷政治に大きな影響力をもっており、朝廷内での仮殿下賜に関する合意形成に大きく関与していたと考えられる。今後同時期の土御門家の朝廷との関係をより詳しく考察する必要があるが、土御門家側は仮殿の拝領が先代からの念願であっただけでなく、祈祷・信仰の場である内侍所を拝領することで朝廷との結びつきを強める目的があったため、縁戚関係にある光成を介してより積極的に朝廷に拝領を働きかけたのではないだろうか⁵¹⁾。

さらに、内裏焼失にともない仮御所に新造された安政度の仮殿の場合も下賜先決定に関する史料は確認できない⁵²⁾。ただし、安政度に造営された神嘉殿には朝廷の念願であった桧皮葺が採用され、内侍所仮殿とする条件が整いつつあった。にもかかわらず、続く慶応度には朝廷は仮殿の重要性を強調し新造を要求している。このような状況を考慮するならば、朝廷には朝幕関係安定を図るとともに、仮殿の存在・重要性を強調するために、幕府の庇護が厚い霊光殿天満宮へ下賜する意図があった可能性を指摘しておきたい。

そして、慶応度の場合、朝廷としては、神嘉殿が仮殿としての条

件を満たすなか仮殿新造中止の案を全く無視することは難しいが、内侍所としての機能を果たす唯一の建物である仮殿は必要である。そこで、今回は仮殿を造営するが、以後の本殿修理時からは内侍所の機能を唯一果たす仮殿を確保できる(朝廷側の主張)一方で仮殿新造の必要がなく費用等を節約できる(幕府側の主張)、という両者の意見を取り入れた仮殿常設という方法を選択することで、朝廷・幕府ともに折り合いをつけたものと考えられる。

結

以上、寛政度内裏造営以後の内侍所仮殿の造営とその下賜について確認した。

寛政度以前と大きく異なるのは、上・下御霊社への下賜が相次いで却下されたことと、神嘉殿との関係であろう。

内侍所仮殿は、内侍所本殿と同じく神事・信仰面で重要な役割を果たす建物であった。そして上・下御霊社へ下賜された際にも朝廷のための祈祷を行うことが下賜先を決定する理由のひとつであった。上・下御霊社では寛政度内裏造営以降も朝廷のための祈祷などの神事が引き続き行われており、さらに上・下御霊社の祭礼は朝廷の年中行事のなかに組み込まれていた。

しかし、文化度には上・下御霊社からの仮殿の拝領願は却下される。これは、朝廷が、内裏建物の造営や修理費用を節約し、なおかつ仮殿として用いるために神嘉殿を桧皮葺にすることを目的とし、仮殿を神嘉殿に転用することを選択したからである。ただし、桧皮葺の神嘉殿の維持費用の問題などもあり、仮殿を神嘉殿に転用することは実行されず、以後、仮殿は新造され、前例と同じく仮殿は下賜される。そして、嘉永度には、先例があり、議奏広橋光成を介して下御霊社よりも強く拝領を願い出ていたと考えられる土御門家へ下賜されることになった。上・下御霊社が拝領した仮殿は公家や公卿、都市民衆が自由に参詣できる場となったのに対し、土御門家が拝領した仮殿は、多くの人々の目にあまり触れることがない邸宅内のより私的な祈祷の場として機能することになる⁵³⁾。

一方、なぜ神嘉殿を内侍所仮殿の代替とするという案が浮上したのかという問題に目を向けるならば、朝廷は威信をかけて造営した神嘉殿が天皇の象徴である神鏡を奉安する内侍所として適当であるとの認識を示すことで、神嘉殿の重要性や神聖性を強調する目的があった可能性が考えられよう。今後は、神嘉殿の造営・修復に加え、神事開催等を含めて神嘉殿の使われ方について検討する必要がある。

最後に、内侍所仮殿、本殿の重要性を確認しておきたい。神嘉殿造営をすすめる過程で建前として仮殿新造中止が提言されるが、結局何度も理由をつけて仮殿を造営したのは、神鏡を奉安し神事を行う場として内侍所本殿が必要不可欠であり、その本殿と同じ機能をもつのは仮殿だけであるとされていたからである。なお、安政度に造営された内侍所本殿は明治23年に樞原神宮(本殿)へ下賜されている⁵⁴⁾。

註

1) 岸泰子「近世内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」『日本建築学会計画系論文集』575、2004年1月。

2) 内侍所の概要や特徴については、前掲拙稿「近世内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」ならびに岸泰子「室町後期・戦国期の内侍所」(『日本建築学会計画系論文集』583、2004年9月)で述べる。

- 3) 京都府教育委員会『京都府の近世社寺建築』、1983年。藤岡通夫『京都御所』、中央公論美術出版、1987年。
- 4) 藤田勝也『古代・中世における宮中祭祀施設に関する研究』、京都大学修士論文、1984年。以下、本稿で取り扱う藤田勝也氏の指摘は本修士論文にもとづく。
- 5) 宮内庁書陵部所蔵。
- 6) 近世の神嘉殿に関しては、藤田覚『幕末の天皇』（講談社選書メチエ、1994年）を参照した。また、同書では、近世の神嘉殿は、神嘉殿代や中和院代（古来、中和院の正殿が神嘉殿であった）と称されたところがあるが、本稿で用いる史料上では「神嘉殿」という名称が多用されていることから、本稿は神嘉殿で統一した。
- 7) 文化7年内侍所仮殿造営に関する過程は、「内裏仙洞御所造営関係年表」（『中井家文書の研究』7、中央公論美術出版、1982年）を参照した。同年表には、天保度・嘉永度の内侍所本殿・仮殿に関する事項が記載されており、第2、3章でも参照した。
- 8) 『伊光記』東京大学史料編纂所謄写本所蔵。文化7年7月10日条には、本殿の検皮や古物が「先格之通」「御殿」へ納め、「休息所」や「刀自通道圍」も先例通り扱うことが記される。これは、前掲拙稿「近世内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」で取り上げた宝暦5年(1755)などの記録と同じく、本殿の古材は朝廷が納め、刀自通路などは刀自に納めることを意味すると考えられる。
- 9) 『伊光記』文化8年4月8日条には、修理職奉行へは御御車置所、斎へは刀自休息所などがほぼ先例に従って分配されたことが記される。
- 10) 『伊光記』文化8年4月8日条には、上・下御霊社へ下賜しないことが伝えられている。
- 一、仮殿今度へ御用ニ付不被下之旨、上下御霊之輩申渡事、殿下へ申入候、可申渡此節（聖護院宮へ御仰事渡申入旨、殿下伺完了、）
- 11) 註6）参照。
- 12) 宮内庁書陵部所蔵。
- 13) 内閣文庫所蔵。
- 14) 島本町史編さん委員会編『島本町史』本文編、1975年。
- 15) 東京大学史料編纂所所蔵。
- 16) 同史料には、「雑舎」や「廊下」なども文化度の例にあるものには下され、例にないものへの寄附・下賜は行わない方針が示されている。また、「残分者」は修理方が囲み置き、修理に用いることが記される。
- 17) 官幣大社水無瀬神宮『水無瀬神宮文書』（1941年）にも、天保度の下賜に関する史料はない。
- 18) 『三条実万手録』第2（岩崎英重編、日本史籍協会、1926年）所収。また、仮殿造営は『基豊公記』（東京大学史料編纂所所蔵）にも詳しいが、事実関係・日付等は三条実万の記録と一致する。
- 19) 三条実万『公武御用日記』嘉永4年(1852)5月27日条に
内侍所仮殿、当月中皆出来候、来月八日九日之内上棟被仰出候様致度旨、
附武士書状昨日到来申入、如先例可取計答命、
とあり嘉永度造営の仮殿も短期間で準備されたことがわかる。
- 20) 三条実万『公武御用日記』嘉永4年(1852)7月2日条。
内侍所御仮殿御寄附願、下御霊主願書例書二通、去月同役内覧了、附議奏卿置了、
- 21) 三条実万『公武御用日記』嘉永4年(1852)11月2日条。
賢所仮殿土御門家へ御寄付之事、今朝陰陽頭願書被持参落手了、殿下持参入覽可被命参内之上附番広橋了、
- 22) 三条実万『公武御用日記』嘉永4年(1852)11月3日条（括弧内は筆者による）。
- 内侍所仮殿御寄附其外依先例拝領願且職奉行（修理職奉行）等拝領事、各依請被 仰出候、於仮殿者今度土御門家へ御寄付之由、被 仰出了、委細書取被為見願書被返之、
- 23) 「権殿」とは、「社殿を造営する・修復する際、神体を臨時に奉安する殿舎」（『日本国語大辞典』）のことを指す。『御寄附之記』の内容は、予てから仮の社殿でもいいので御祈禱の建物を造営したかったところに、内侍所仮殿を拝領できることは有難いことである、と解釈できる。造営に関する記述もあり、仮の祈禱の場として造営する旨は記録されておらず、内侍所仮殿拝領を「全家神之 御高德深恐入次第也。」と表現することからも、仮殿が土御門家の仮の祈禱の建物であったということは考えにくい。むしろ、土御門家へ下賜される際に、権殿と表現されるような神体を奉安する場に仮殿が下賜されたことが重要であろう。
- 24) 前掲拙稿「近世内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」参照。
- 25) 前掲拙稿「近世内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」参照。安永度に土御門家に仮殿が拝領された際、朝廷は「毎度之例」ではないことを示す。
- 26) 本章の内裏・内侍所本殿・内侍所仮殿の造営（修理）の年日に関しては、「内裏仙洞御所造営関係年表」（『中井家文書の研究』8、中央公論美術出版、1982年）を参照した。
- 27) 宮内庁書陵部所蔵。安政2年当時、東坊城聡長は武家伝奏を勤める。
- 28) 『野宮定功修理職奉行備忘』（宮内庁書陵部所蔵）にも、安政度の内裏・内

- 侍所仮殿造営ならびに桂家・靈光殿天満宮への建物引渡しが記録される。
- 29) 『庚午十月改 社寺録 上京之部式』（京都府庁文書、京都府総合資料館所蔵）所収の靈光殿天満宮の項を参照した。
- 30) 応仁・文明の乱以後から若江家再興までの記述は、「靈光殿天満宮 参拝の葉」（靈光殿天満宮）によるが、根拠となる史料は不明である。
- 31) 若江家の略系譜については、松田敬之「近世期官方・摂関方殿上人に関する考察ー『若江家所蔵文書』を中心にー」（『大蔵山論集』49、2003年）を参照した。
- 32) 宮内庁書陵部所蔵。東坊長聡長の日記である。
- 33) 本史料文中で、「寛政の例の如く」とあるのは、寛政度内裏造営の際に仮皇居が置かれた聖護院に仮皇居の建物が下賜されたことを指している。ただし、寛政度造営の仮内侍所は、前掲『内侍所仮殿御寄附之記』にもあるように下御霊社へ下賜されたという。『経逸公記』（京都大学文学部総合博物館所蔵）にも下御霊社へ内侍所仮殿が下賜されたことが記されている。よって、寛政度の内侍所仮殿が下御霊社へ下賜されたことは間違いないと考えられ、寛政度の聖護院への仮御所建物の下賜のなかに内侍所仮殿が含まれているのかは更なる検討を要すると考えられる。
- また、桂家へすべての仮建物が下賜される方針は、同年正月13日条の以下の記述からも確認できる。
- 一、内侍所仮屋以下夫々分配、桂家仮建物惣而桂家へ被下、^(ママ)驚家被建候地震御用意御建物驚尾家へ被下等之事、各伺通可取計議奏被示、
- 34) 宮内庁書陵部所蔵。
- 35) 『桂宮日記』同日条には、刀自部屋は斎へ、拾八間廊下は御厨子預等へ、御御車置所は修理職奉行へ下賜されることが記される。斎や修理職奉行等へは、先例と同様、建物の下賜があったことがわかる。
- 36) 京都府立総合資料館所蔵。
- 37) 桂家の邸宅へ残された場合には、安政度の内裏が造営され桂仮御所から内裏へ天皇が遷御した後も、「桂御所」と称される点が重要となつてこよう（前掲『大日本維新史料稿本』安政2年11月27日条）。これは、桂家に引き渡すということは、場所は異なるが、「御所」内に仮殿が残されることとなり、仮殿が他所へ下賜されることがなくなったことを意味するからである。
- 38) 慶応元年(元治2年)の仮殿造営に関しては『野宮定功公武御用日記』（宮内庁書陵部所蔵）に詳しい。また、前掲「内裏仙洞御所造営関係年表」（『中井家文書の研究』8、所収）からも仮殿造営に関する日付が確認できる。
- 39) 内閣文庫所蔵。本史料は、「三月」とのみ日付が記されているが、さらに後世に「元治2年」（慶応元年）と加筆されている。筆者も、仮殿造営等の状況からみて慶応元年に造営された仮殿についての書簡であると判断した。
- 40) 京都大学付属図書館所蔵（前掲『中井家文書の研究』8、所収）。
- 41) 奥野高広『皇室御経済史の研究』正統、敝傳書房、1942・44年。
- 42) 東京大学史料編纂所所蔵。
- 43) 『御造営手留』には、朝廷費用「御手沙汰」で内裏建物の造営・修理を行うことへの懸念が強調され、安政以後の神嘉殿の造営・修理等の費用を半分負担でいいのか江戸にうかがう記録が残される。
- 44) 藤田覚「寛政内裏造営をめぐる朝幕関係」『日本歴史』517、1991年6月。前掲藤田覚『幕末の天皇』にも寛政度内裏造営の経緯は詳しい。
- 45) 前掲『御所々御入用筋書抜』4、所収。
- 46) 宮内庁書陵部所蔵。執次は、各御所の会計を担当する口向諸役人の最上席。本史料は、禁裏御所の執次、日記役が記した記録である。口向は、物品購入や警備など様々な役割を担っていたため、記録内容も多岐にわたる。
- 47) 『日本国語大辞典』（小学館）には「清浄」とは、「清らかでけがれの無いこと。また、そのさま。」とある。
- 48) 内閣文庫所蔵。
- 49) 同じ内容が前掲「神嘉殿代以後御修復心得方之儀ニ付書付」にある。
- 50) 加えて、先の三条実万の日記から、土御門家が拝領願を出した嘉永4年11月2日の当番は広橋光成であったこともわかる。
- 51) 土御門晴雄の妻は、広橋光成の娘である（『日本史総覧』）。
- 52) 前掲松田「近世期官方・摂関方殿上人に関する考察ー『若江家所蔵文書』を中心にー」によると、若江家は靈光殿に関する文書を所蔵しているようだが、現在は閲覧できない状態にある。
- 53) 遠藤克己氏が『近世陰陽道史の研究』（新人物往来社、1994年）紹介される土御門家の邸宅図（京都府総合資料館所蔵「若杉家文書」所収「還幸御謝祭之図」、安政2年(1855)）には、邸宅敷地内に仮殿を拝領して建てられた祈禱のための建物が記される。形式は拝領前の仮殿とほぼ等しい。
- 54) 『樞原市史』本編上巻（改訂樞原市史編纂委員会編、1986-87）に詳しい。

（2004年10月10日原稿受理、2005年1月27日採用決定）